

麦作雑草の外来キンポウゲ

トゲミノキツネノボタン とイボミキンポウゲ

農研機構 九州沖縄農業研究センター
大段 秀記

・トゲミノキツネノボタン：

Ranunculus muricatus L. (spinyfruit buttercup など)

・イボミキンポウゲ：

Ranunculus sardous Crantz (hairy buttercup など)

いずれもヨーロッパ原産のキンポウゲ科キンポウゲ属の冬生一年生草本。トゲミノキツネノボタンは1915年に仙台市で、イボミキンポウゲは1980年に松江市で最初に確認された。両種ともに、九州の麦畑では雑草として繁茂しており、近年、問題地域は拡大傾向にある(写真-1)。

■分布

両種ともにヨーロッパ原産で、西アジア～中国、北米、オーストラリアに分布している。トゲミノキツネノボタンは南米チリにも分布情報がある。国内では、トゲミノキツネノボタンは1915年に仙台市で確認されて以来、本州、四国、九州の広い範囲に分布が確認されている。イボミキンポウゲは1980年に松江市で確認されて以来、分布域を拡大しているもののトゲミノキツネノボタンほどではなく、西日本を中心に分布している。路傍等に多いが、九州、山口では麦作圃場でも確認される。

■形態と見分けるポイント

両種はよく似るがトゲミノキツネノボタンのほうが全体的にやや大柄の印象を受ける。草丈は50cm程度であるが、麦作圃場内では80cm程度になり、収穫前には麦の穂と同程度の高さまで伸長する。イボミキンポウゲの根生葉は頂片が独立するが、トゲミノキツネノボタンはしないことから見分けることができる(写真-2)。両種ともに種子(瘦果)の側面に突起があるが、その名の通り、トゲミノキツネノボタンはトゲ状、イボミキンポウゲはイボ状であり(写真-3)、種子の大きさも前者が約6.5mm、後者が約2.5mmであることから見分けは容易である。

■雑草としての情報

両種ともに暖地の麦作圃場で雑草として繁茂し、水稻後圃場に比べて大豆後圃場で発生量が多くなる。繁茂圃場では大きな減収を招くだけでなく、収穫時にコンバインへのからみつきによる作業阻害や収穫物への種子の混入が問題となることがある。



写真-1 トゲミノキツネノボタンが繁茂した小麦圃場



写真-2 根生葉の形態の違い
(左：トゲミノキツネノボタン、右：イボミキンポウゲ)



写真-3 瘦果(集合果)の形態の違い
(左：トゲミノキツネノボタン、右：イボミキンポウゲ)

■防除に関する情報

両種ともに土壌処理剤ではペンディメタリンの効果が高いが、ジニトロアニリン系除草剤に抵抗性を持つスズメノテッポウの発生圃場では使用できない。一方、抵抗性スズメノテッポウに効果が高いチオカーバメート系のプロスルホカルブの効果は低く、抵抗性スズメノテッポウ対策で連用した圃場で繁茂する傾向がある。茎葉処理剤では、アイオキシニルの効果は4葉期まで生育の進んだ個体では低くなる。チフェンスルフロンメチルとベンタゾン4葉期までの個体に対して高い効果が期待できる。両種ともに麦作圃場での埋土種子の生存年限は5年以上であることから、一度繁茂すると長期間にわたっての対策が必要になる。

参考文献

- 川名義明・森田弘彦 1991. 雑草研究 36 (別), 102-103.
- 川名義明ら 1996. 雑草研究 41 (別), 62-63.
- 川名義明ら 1998. 日作九支報 64, 34-36.
- 森田弘彦ら 1989. 雑草研究 34 (別), 47-48.
- 清水矩宏ら 2001. 日本帰化植物写真図鑑. 全農教, p.77.
- 竹松哲夫・一前宣正 1993. 世界の雑草II 離弁花類, 全農教, pp.523-524.